

新 今昔物語 第21話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑨
「築城の 苦勞を語る」
残念石



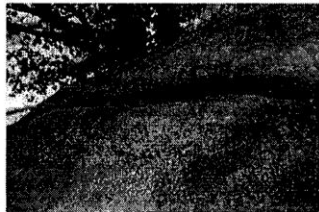
大阪の観光名所で特別史跡である大阪城は、豊臣秀吉によって天正11年(1583)に築城され、元和元年(1615)の大阪夏の陣によって豊臣家滅亡とともに焼失後、元和6年(1620)徳川幕府により再建されたものです。残念ながら天守閣は寛文5年(1665)の落雷により焼失し、昭和6年(1931)に地元の人々によって復興されたものです。石垣は当時のままで、壮大な城であったことを物語っています。

その石垣の石材は、膨大な量を必要としたことから、周辺の六甲山系、生駒山系のほか、遠くは小豆島、岡山県さらに福岡県からも採石されていました。また、秀吉の大阪城の石垣は、現在の大阪城の地下約10層に埋没されていますが、そのときの石材も同じような状況で採石されていたと思われ

ます。徳川幕府による築城は天下普請(各大名に持ち場を与える)で行われたため、諸藩は競って各地の石切場から石材を切り出しました。それらの石材を切り出した場所が、大東市龍間地域にも残されており、石切場の名称で遺跡として登録されています。石を割るときに楔(矢)を打ち込むために彫られた「矢穴」の残る石や、諸藩の石切場(丁場)を示す刻印のある石が今も残っています。平成2年(1990)の発掘調査では、石地に深く関わっていたとされる地の有力者足立家を示す石柱も確認されています。



中垣内一丁目付近に残る残念石

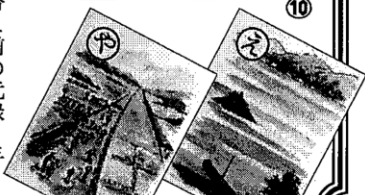


残念石に残る「矢穴」跡

現在、中垣内一丁目と東大阪市善根寺町六丁目の市境に、一戸建てほどの巨大な「残念石」が残されています。(生涯学習課)

新 今昔物語 第22話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑩
「益軒の みた深野池」
「大和川 北から西に 付け替える」
今はなし



江戸時代の中頃まで、大東市には深野池という池がありました。今から約6千年前の縄文時代に河内平野が海であった時の名残で、北は現在の寝屋川市河北から、南は東大阪市元町あたりまでの、南北約4.5km、東西約2kmの大きさをしました。本市では、深野、三箇、谷川、御供田、泉町、平野屋、南新田などの地域が含まれていました。柏原から堺へ流れる現在の大和川は、江戸時代に新しく造られたもので、それまでは柏原から幾筋もの流れに分かれ河内平野を北上し、その一つである吉田川が深野池に流れ込んでいました。当時は長雨が続きと各所で堤防が決壊し、洪水の被害が絶えなかつたため、川筋の農民たちは、川を西へ真つすぐ堺の方へ流すよう幕府に訴え続け、宝永元年(1704)に、ついに付け替え工事が行われたのでした。

深野池は翌年の宝永2年(1705)から開発が始まり、新田として生まれ変わりました。私たちはもうその姿を見ることはできません。

せんが、付け替え前の元禄2年(1689)に、当地を旅した貝原益軒という学者がその著「南游紀行」の中で、池の様子を次のように記しています。

「池の広さは南北2里、東西1里で湖のようで、そこには島があり三箇という村がある。島には漁で暮らす家が七、八十戸あり、田畑もある。池にはコイ、フナ、ナマズ、ハスなど魚が多く、毎日魚を捕って大坂へ売りに行く。また、蓮やみずぶき、葦が多く生え、それを採って生活に用いている。特に菱が多く、その実を採って、飯や団子や粥にして食べ、また、売ったりもした。菱を採る日は決まっており、菱には税がかからなかつた。」

この記述から、三箇はかつて深野池に浮かぶ島であったことが分かります。今日の大東市の姿が形成されるのは、大和川の付け替え、深野池の開発以降のことといえるでしょう。(生涯学習課)